

千葉県の高校教師が連携して「学び直し」を推進

県内全域での
「学び直し」の定着に向け、
学校間の情報交換を促進

現行学習指導要領に「義務教育段階での学習内容の確実な定着」が明記されたこともあり、いわゆる「学び直し」が全国的に進められている。そうした中、千葉県では、各校の学び直しの取り組みやその成果、課題などを共有する情報交換会が、高校教師有志の手で行われている。情報交換会の運営を担ってきた3校の校長に、学び直しを継続・発展させるためのポイントを聞いた。

次の3つが例示されている。

- ① 義務教育段階での学習内容の確実な定着に向けた学習機会を設ける。
- ② 必修教科・科目の単位数を増加させて、十分な習得を図る。
- ③ (義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることを目標とした) 学校設定科目等を開設し、必修教科・科目の前に履修させる。

「答申」ではそれらを踏まえ、「学校設定教科・科目の設置を含めた対応が可能であるという、学習指導要領における位置付けをより明確にする」とともに、具体的な取組例について周知を図っていくことが求められる」としている。

千葉県「学び直し」の情報交換会

「学び直し」の充実を図る
教師有志のネットワーク

千葉県では毎年、公立高校の教師有志が集まり、自校の学び直しの取り組みをより充実させるために、各校の取り組み内容やその成果、課題などを共有する情報交換会(写真1)を行っている(ベネッセは、模試データや他校の成功事例情報の提供・分析者として参画)。情報交換会は、13年に4校が参加して始まり、徐々に



千葉県立市川工業高校 校長
藤平 秀幸 ふじひら・ひでゆき
教職歴38年。同校に赴任して3年目。



千葉県立浦安高校 校長
渡邊 啓之 わたなべ・ひろゆき
教職歴34年。同校に赴任して5年目。



千葉県立松尾高校 校長
木内 和夫 きうち・かずお
教職歴36年。同校に赴任して1年目。

規模を拡大。16年の第6回には、県内全域の15校から、管理職や進路担当、学年主任など、様々な分掌の29人が集まった。学び直しの導入を目指す高校からの参加も歓迎している。

情報交換会の運営を担ってきた千葉県立浦安高校(以下、浦安高校)の渡邊啓之校長は、学び直しの意義を次のように語る。

「基礎学力は、生徒の『生きる力』の根幹に位置づけられています。それをすべての生徒にしっかり定着させて大学や社会に送り出せるように、学び直しは重点的に取り組むべきことだと考えています」

生徒は基礎学力を身につけることで、高校の学習内容への理解を深められる。そうなれば、進路選択の幅

ますます求められる
「学び直し」の充実

中央教育審議会は次期学習指導要領の策定にあたり、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下、「答

申」)を、2016年12月に取りまとめた。「学び直し」は、「共通性の確保」と「多様性への対応」を踏まえた教育課程を編成する上で、その充実が求められている。周知のように、現行の学習指導要領においても、「義務教育段階での学習内容の確実な定着」に向けた学習機会の設置が明記され、



写真1 第6回情報交換会の様子。参加者1人ずつ自校の取り組みの内容や成果、課題などについて発表。また、ベネッセ社員による模試データの分析結果なども共有され、学習意欲と進路意識との相関などが示された。

を広げることもつながる。渡邊校長とともに、情報交換会の運営に携わってきた同県立市川工業高校（以下、市川工業高校）の藤平秀幸校長は、次のように述べる。

「近年は、推薦・AO入試に学力試験を課す大学や、就職試験に学力試験を課す企業が増える傾向にあります。多くの選択肢から自分の進みたい道を選べるようにするためには、専門高校でも普通教科・科目の学力向上が必要です。その基盤として、本校では学び直しを重視しています」

17年度から情報交換会の幹事校となる同県立松尾高校（以下、松尾高校）の木内和夫校長は、学び直しを推進する必要性を次のように話す。

「多くの高校が、中学校までの学習内容が十分には定着していない生徒を迎え入れています。生徒の基礎学力の不足を実感し、『何とかしなければ』と思う先生も少なくありません。学び直しの普及・充実は、高校教育にとって切実な課題となっています」

ただ、学び直しの必要性を感じながらも、導入や推進が思うように進んでいない学校も珍しくない。その要因として、情報交換会の参加者からは、校内の合意形成の難しさが共通して挙がっていた。前述の3校は、校内の合意形成をいかに図り、学び直しを推進していったのか。取り組みの具体的な内容とともに見ていく。

千葉県立市川工業高校

まずは可能なところから改革の第一歩を踏み出す

市川工業高校では、毎日10分間の朝学習の時間を設け、国語・数学・英語でベネッセの「マナトレ」*1に取り組みさせている（図1）。

「普通教科・科目の基礎学力は、専門教科・科目の学びを深める上でも必要です。全生徒にしっかりと身につけさせたいと考えました」（藤平校長）

学び直しを始めるにあたっては、

図1 千葉県立市川工業高校の取り組み概要

背景

- 基礎学力の不足から、希望進路が実現できない生徒が目立った
- 遅刻が多く、一部生徒の生活態度に課題があった

内容

- 国語・数学・英語の「マナトレ」を導入し、全学年で学び直しを始めた。まず、朝のホームルームの時間に週3日実施し、取り組みに対する教師の理解を深めた。次いで、朝学習の時間をつくり、学び直しを毎日行うことにした
- 藤平校長が教職員全員との個人面談を行い、学び直しに対する意識づけを重ねた
- 「基礎力診断テスト」の成績を各学年団で分析

成果

- 生徒の学習意欲が高まり、成績も向上
- 授業を落ち着いて聞く生徒が増え、遅刻も減少

千葉県立市川工業高校

◎設立：1943（昭和18）年 ◎形態：全日制・定時制/機械科・電気科・建築科・インテリア科/共学

◎生徒数：1学年約240人 ◎2016年度進路実績（現役のみ）：4年制大進学28人、短大・訓練校、専門学校進学42人、就職128人

◎URL：<http://cms1.chiba-c.ed.jp/ichiko/>

「時間の確保が難しい」と言う教師が多かった。そこで、藤平校長が「まずは一步を踏み出そう」と呼びかけ、暫定的に朝のホームルームの時間に導入。毎日ではなく週3日だったが、取り組みを始めて間もなく、落ち着いて授業に臨む生徒が増えていった。

「生徒は学び直しによって『やれ』と自信を持ち、学習に向きになったようです。それとともに生活態度も徐々に改善されました。また、生徒の変化を目的の当たりにした先生方の中にも、学び直しに次第に前向きになっていった先生がいました。それが、朝学習の時間の設置

につながったのです」（藤平校長）

藤平校長は、教職員との個人面談を行い、学び直しの重要性を伝える。「基礎学力の定着により、生徒は進路の可能性をさらに大きく広げられます。そうなれば、工業高校の認知度向上にも影響してくるものと考えられます」（藤平校長）

また、生徒の学力をこまめに測る体制を整えるため、ベネッセの「基礎力診断テスト」*2の成績分析会を、学年ごとに行っている。そして、GTZ*3が大きく伸びた生徒は、学年集会での表彰を予定している。

学び直しの成果は、生徒の生活・

*1 ベネッセの教材の1つ。学習力を身につける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。 *2 GTZ（学習到達ゾーン）という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性（自我同一性）を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。 *3 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」～「D3」の15段階があり、基礎力診断テストでは、そのうち「A2」～「D3」で評価される。

学力の両面に表れている。生徒の遅刻数は減少し、基礎力診断テストでは、1回目から2回目にかけて各教科それぞれ学年の3分の1以上の生徒が、前回よりも成績を伸ばした。年末度には、希望制の実力テストを実施し、年間のまとめを行った。

「生徒の頑張りによってすぐに反応し、個別指導などに取り組み先生が、若手を中心に出てきています。そうした意欲的な先生に学年主任を任せるなどしたことで、学び直しという新しい文化が本校に定着しつつあるのだと思います」（藤平校長）

千葉県立浦安高校

学校が一丸となって改革を進める組織づくり

浦安高校は、生徒の学力向上を主軸に据え、学校改革を推進している（図2）。習熟度別授業やチーム・ティーチングによる指導などのほか、成績下位層の生徒に対して、定期考査前の放課後や夏季休業期間などに補習も行う。さらに、15年度の1年生からは生徒が任意で参加する朝自習の時間をつくり、国語の学び直しの場とした。ただ、同校は部活動が盛んなため、課外で学習指導を行う

図2 千葉県立浦安高校の取り組み概要

背景

- 義務教育段階での学習内容が定着していない生徒が少なくなかった

内容

- 生徒の学力向上を目指した学校改革に着手。その一環として、朝自習の時間で国語の学び直しを開始
- 校外からの声によって教師の共通理解を深めようと、「コミュニティ・スクール」の指定を受ける。学校運営協議会に6つの委員会をつくり、どの教師もいずれか1つの委員会に所属することにした

成果

- 生徒の国語の成績が向上
- 教師が一丸となって学校改革に取り組む体制が整った

千葉県立浦安高校

- ◎設立：1973（昭和48）年
- ◎形態：全日制／普通科／共学
- ◎生徒数：1学年約240人
- ◎2016年度進路実績（現役のみ）：4年制大進学56人、短大、専門学校進学130人、就職36人
- ◎URL：<http://cms1.chiba-c.ed.jp/urayasu-h/>

ことに消極的な教師もいた。そこで渡邊校長は、校外からの声によって教師の共通理解を深めようと考え、15年度には「コミュニティ・スクール」の指定を受けた。保護者や地域住民を交えて構成される学校運営協議会からの評価を、学校改革の原動力にしようというわけだ。さらに、学校改革の方向性を具体的に検討するために、生徒指導委員会や学力向上委員会など、6つの委員会を学校運営協議会に設置し、全教師がいずれか1つの委員会に所属することにした。「学校運営協議会からの評価には、本校の課題が客観的に示されます。

それと向き合うことで、先生方に学習指導を充実させる必要性を実感してほしいという思いがありました。また、学校運営協議会内の委員会に全教師が所属することで、先生方一人ひとりの学校改革への意識が高まると考えました」（渡邊校長）

そうした取り組みの結果、校内の合意形成は大きく進み、新たな活動も生まれた。例えば、16年度には基礎力診断テストを導入。テスト結果を分析して生徒一人ひとりの課題を洗い出し、それを習熟度別の指導などに生かすことを目指している。さらに、18年度からは朝自習を教

千葉県立松尾高校

取り組みを発展させるために校長が率先垂範

育課程に組み込み、参加を必須とする予定だ。その背景には、現在先行して実施している国語の朝自習により、学年の半分以上の生徒が基礎力診断テストで国語の成績を伸ばしたという成果がある。

渡邊校長は、同校の学校改革における自身の役割を次のように話す。「生徒の課題に応じて教育活動を絶えず変えていくためには、先生方全員が当事者意識を持って取り組み組織をつくらなければなりません。それは、学校運営の責任者である管理職の務めだと私は考えています」

松尾高校は、学び直しの先進校だ（図3）。例えば、国語・英語では授業の冒頭10分間をマナトレへの取り組みに充て、定期考査ではマナトレから数問を出題。数学でも、家庭学習の課題としてマナトレに取り組みさせている。さらに、学び直しに特化した部活動「勉強部」も設けている。活動内容は国語・地理歴史・公民・数学・英語の各教科・科目の学習で、生徒が放課後に問題演習に取り組み、

図3 千葉県立松尾高校の取り組み概要

背景

- 大学・専門学校進学後の退学者や、学力不足で希望進路を実現できない生徒が少なくなかった

内容

- 学び直しのために、国語・数学・英語で「マナトレ」を全学年に導入。国語・英語は授業の冒頭10分間で取り組ませ、数学は家庭学習の課題として活用
- 学び直しのための部活動「勉強部」を設置。生徒が国語・地理歴史・公民・数学・英語の問題演習に取り組むほか、各教科担当が解説も行う

成果

- 基礎学力が向上する生徒が増え、「実力診断テスト」のGTZでDゾーンが減少
- 学力とともに進路意識を高める生徒が増え、センター試験受験者数が激増

千葉県立松尾高校

◎設立：1909（明治42）年 ◎形態：全日制／普通科／共学（2年生から文系コース、理系コース、生活コース、ビジネスコース、福祉コースの5コースに分かれる） ◎生徒数：1学年約160人 ◎2016年度進路実績（現役のみ）：4年制大進学45人、短大、専門学校進学73人、就職39人 ◎URL：<http://www.chiba-c.ed.jp/matsuo-h/>

各教科担当が解説を行う。

学び直しの成果は著しい。ベネッセの「実力診断テスト」（*4）のGTZがDゾーンの生徒は、この1年間で3分の1に減少。生徒の進路意識も高まり、センター試験の受験者数は、13年度9人↓14年度20人↓15年度45人と、3年間で5倍となった。

また、木内校長は、課題だった学校全体で学び直しを行う体制づくりに向け、16年度に学校運営のグランドデザインを策定。学び直しを「『生きる力』の育成」の一環と位置づけた。「どの先生にも学び直しの取り組みに意欲的になってほしいと考え、学

校として学び直しを推進すると宣言しました。先生方が力を合わせてこそ、取り組みは実を結び、発展していきます」（木内校長）

さらに、15年度に指定されたSGHの取り組みでは、言語活動の充実を重視。短歌や俳句を生徒から募り、優秀者を表彰するといったアイデアを、木内校長が率先して出している。

「SGHの取り組みを通じて育成を目指すグローバル人材に求められる資質・能力の1つとして、コミュニケーション能力が挙げられます。特に、言葉の運用能力は生徒の『生きる力』の土台になるものであり、学

び直しにも密接にかかわります。つまり、SGHと学び直しは相反する取り組みではなく、一体のもので。どちらも引き続き、全校体制で取り組んでいきたいと考えています」

言語活動の充実による成果は、早くも表れている。例えば、実力診断テストの国語においては、わずか1年間にGTZのBゾーンの生徒が10%から50%へと激増した。

「本校の学校改革にはよい流れができています。それを次世代に引き継ぎ、さらに充実させるためには、若手の先生の育成が鍵になると考えています」（木内校長）

情報交換会の今後

永続的な運営を目指し組織化を推進

取り組みの継承・発展は、情報交換会でも重要な課題となる。そこで、

運営の組織化を図るために、「Brushup Learning推進連絡協議会」を17年度に設立する。木内校長が会長、渡邊校長、藤平校長が顧問となり、学び直しを推進する各校の管理職を副会長や理事に、現場の教師を事務局に迎える予定だ。

「情報交換会は、学び直しの普及に

貢献できる活動です。教師の異動や退職にかかわらず、取り組みを継続するための組織をつくる必要性を感じました。17年度の事務局には、若

手を含めた本校の教師3人を充てますが、今後は他校の先生にもお願いしたいと思っています」（木内校長）

新たに動き始めた情報交換会に、藤平校長は次のように期待を寄せる。

「組織化によって運営側の意思疎通がより円滑になることで、課題の発見・改善につながると思います」

17年度からは、年2回の情報交換会の実施を目指している。

「定期的に行うことで、会の存在の認知も広めていきたいと思っています。さらに多くの先生方の参加を期待しています」（渡邊校長）

木内校長は、情報交換会の今後について次のように話す。

「学び直しは、生徒のための取り組みであるのと同時に、教師の指導改善のきっかけになるものだと考えています。学び直しに意欲的な先生方の力になれるよう、情報交換会の規模を拡大し、安定して運営していくことが重要です。そこで、いずれは千葉県や教育委員会といった公の組織と連携できればと考えています」

*4 ベネッセの模試「進路マップ」の1つで、教科書レベルを中心に基礎学力を測るテスト。